

学生の実態と社会で求められる力のギャップ

変化が進む社会ではどのような力が求められているのか。
 大学に入学してくる学生は、大学での学びや卒業後の進路に対して
 どのような意識を持っているのか。若手社会人、大学生を対象とした調査データから
 学生の実態と社会で求められる力のギャップについて考える。

1 「社会で求められる力」を学生は獲得していない

社会で求められる力とは果たしてどのようなものか。社会に出る前の学生はその力の性質を認識し、自分に身に付いているかどうかを正しく把握できているのだろうか。

「問題解決力」「継続的な学習力」「主体性」「チームワーク力」が求められる

若手社会人を対象とした調査（図1）によると、社会で求められる力として「問題解決力」「継続的な学習力」「主体性」「チームワーク力」「自己管理力」などの能力や

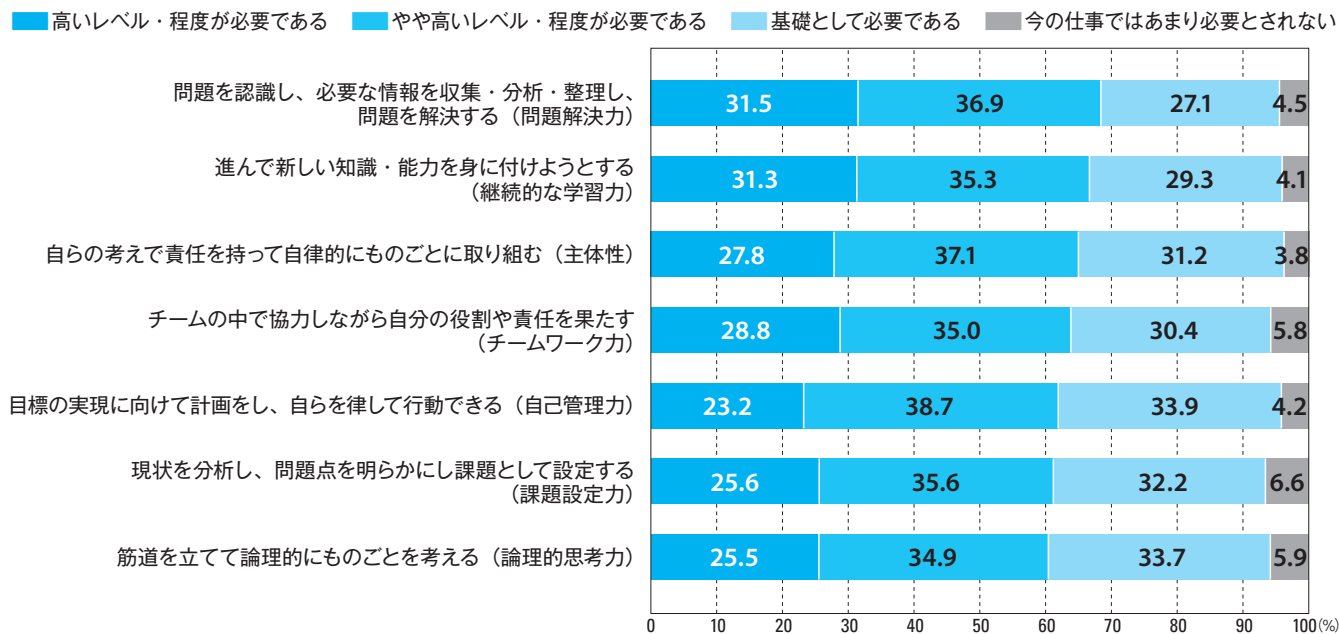
スキルが上位に挙げられた。では、このような力が重要であることを、若手社会人は学生時代から理解し、その獲得に意識的に取り組んでいたのだろうか。

企業と学生では「不足している力」の認識にギャップがある

経済産業省が実施した調査（図2）では、企業が学生に不足を感じている力は「主体性」「コミュニケーション力」「粘り強さ」などである。課題に根気よく仲間と協同して向き合うための力であり、図1の若手社会人の意識

と共通する。しかし図2では、学生は自分に不足している力として語学力や業界の専門知識を挙げており、「企業が不足を感じる力」の学生自身の不足感は、企業評価を下回る。ギャップは大学段階で明らかに発生している。

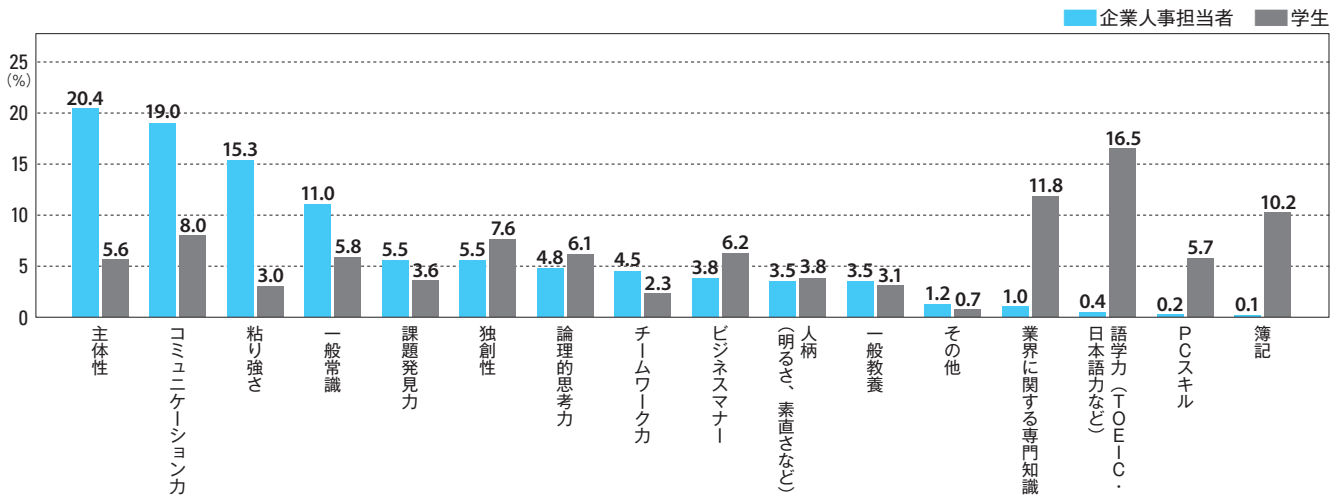
図1 仕事を করতে、次の能力・スキルはどの程度必要とされるか（社会人1～3年目 n=1,732）



出典／Benesse教育研究開発センター「社会に必要な能力と高校・大学時代の経験に関する調査」（2010年）

調査対象／社会人：民間企業（従業員数300人以上・1次産業は除く）、官公庁勤務または専門職（看護師、教員など）の正規職員。大学または大学院卒。社会人1～3年目：1,732人

図2 企業が学生に不足していると思う能力要素 学生自身が自分に不足していると思う能力要素



出典／経済産業省「大学生の『社会人観』の把握と『社会人基礎力』の認知度向上実証に関する調査」を基に編集部で作成
調査対象／企業：全国の企業人事採用担当者1,179人 大学生：全国の大学・修士課程・博士課程の日本人学生1,598人

2 入学してくる学生の実態

学生は社会に出ると「問題解決力」「継続的な学習力」「主体性」「チームワーク力」が求められる。では、そもそも学生たちは、大学入学までにそれらの力の育成につながる教育を十分に受けているのか。「学ぶ力」「考える力」「大学への不安・将来への期待」の面から大学1年生の意識と現状を探ってみたい。

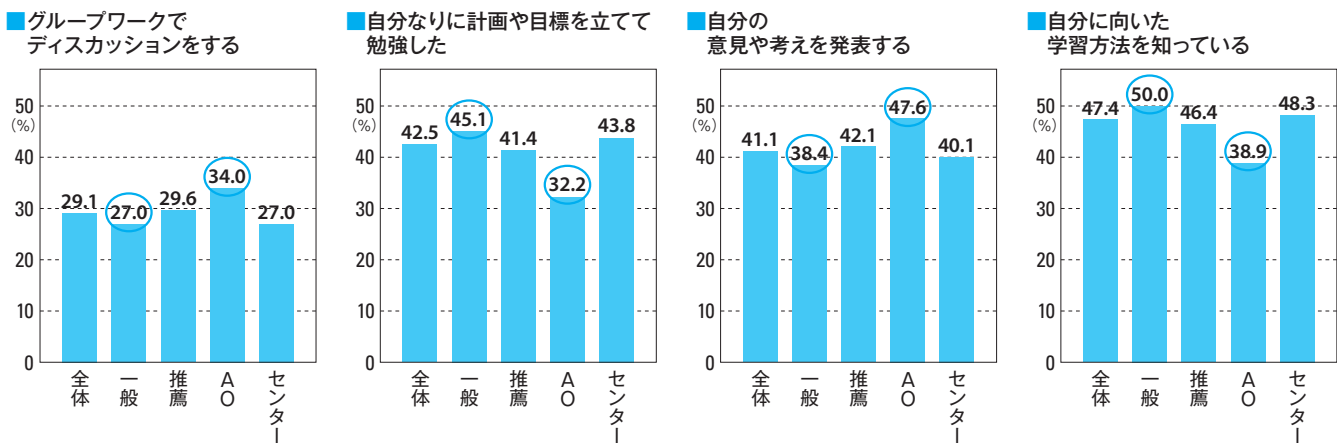
協同的な体験や自律的学習、アウトプット型の学習経験が不足している

グループワークでディスカッションを高校までに経験した学生は30%前後、自分の意見や考えを発表する授業を経験した学生は40%前後と多くない（図3）。社会で求められる「チームワーク力」「主体性」を獲得する機会が、大学入学までの学習では十分でなかったことがうかがえる。また、計画や目標を立てて勉強した経験があり、自分に向けた学習方法を知る学生は半数以下となってい

る。「問題解決力」「継続的な学習力」につながる経験は決して多くはなかったようだ。特に、推薦入試、AO入試による入学者は、こうした自律的学習に関する自己評価が学科試験で選抜された入学者よりも低くなっている。

自校の学生の現状を把握し、大学入学後の早い段階で、多様な学びの経験を与えていくことが、大学にとって重要な課題であると言えよう。

図3 高校までの学習経験・学習習慣



出典／ベネッセコーポレーション大学事業部「大学生基礎力調査I」（2011年）
調査対象／大学1年生 全体89,015人 入試区分別（一般入試36,052人、推薦入試34,421人、AO入試6,693人、センター試験利用7,775人、その他4,074人）

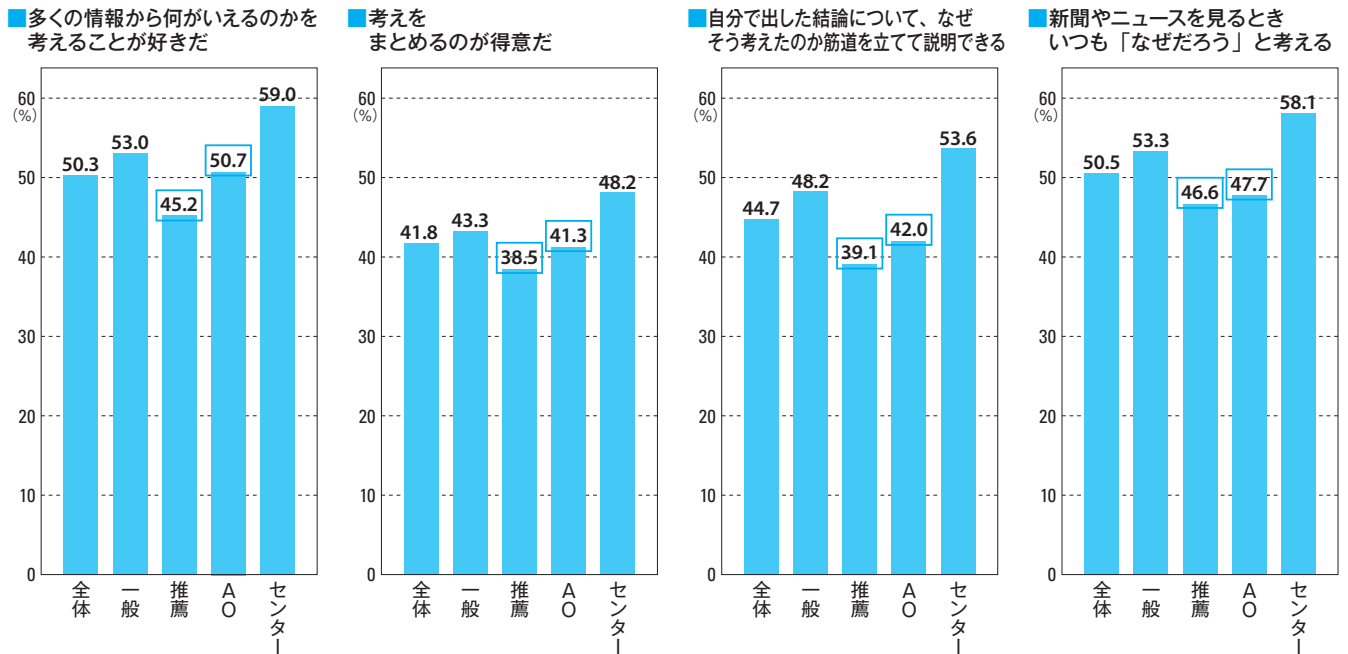
2 入学してくる学生の実態

自ら考える力は、推薦・AO入試入学者の自己評価が低い

入学生の実態を更に見ていく。社会で必要とされる「問題解決力」のベースになるのは、自分自身で考える力である。だが、大学1年生全体では「考えることが好き」な学生は約半数、「考えをまとめるのが得意」な学生は4

割にとどまる（図4）。なかでも推薦入試、AO入試による入学者は、考える力に関する自己評価はいずれも低く、自信のなさや不安感がうかがえる。考える力を伸ばし、自信をつける機会の提供が必要だ。

図4 考える力



出典/ベネッセコーポレーション大学事業部「大学生基礎力調査I」(2011年)

調査対象/大学1年生 全体89,015人 入試区分別 (一般入試36,052人、推薦入試34,421人、AO入試6,693人、センター試験利用7,775人、その他4,074人)

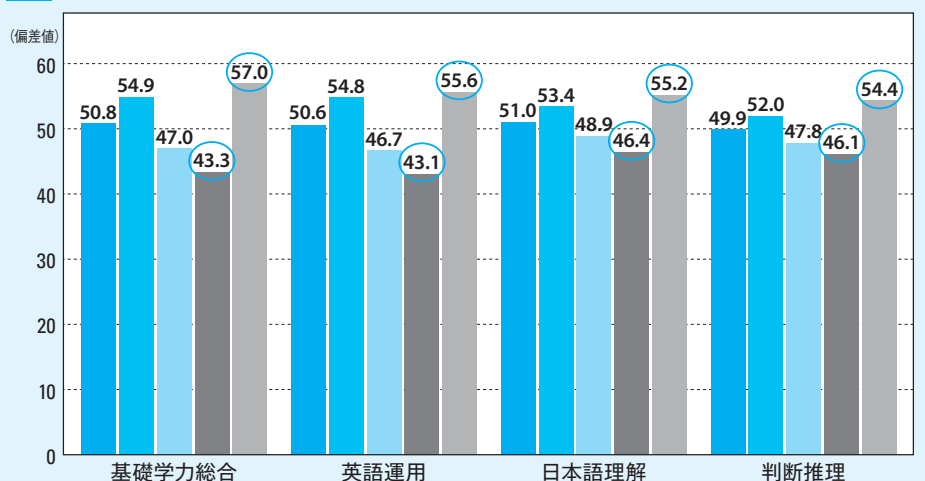
受験した入試の違いによって基礎学力に差がある

入学者の基礎学力についてはどんな課題があるのだろうか。

「大学生基礎力調査I」の基礎学力（図5）の結果によると、受験した入試の違いにより、学生の基礎学力に差が見られる。特に、推薦・AO入試入学者と一般入試・センター試験利用入学者では学力差が大きい。

自校の学生の学力をしっかりと把握し、多様な学生に対して、それぞれの状況に合った最適な教育を提供できるように工夫をする必要性が高まっている。

図5 基礎学力



出典/ベネッセコーポレーション大学事業部「大学生基礎力調査I」(2011年)

2 入学してくる学生の実態

学生は、大学での学習や人間関係に対して不安を抱えている

大学の学習そのものに対して、入学生は大きな不安感を抱えていることも明らかになっている（図6）。推薦入試、AO入試で入学した学生によりその傾向が見られることは、誰よりも学生自身が基礎学力の不足を感じているということの表れであり、大学には確かな支援が求め

られる。また、大学での人間関係に対しても不安感を抱えている学生は多い。一般入試、センター試験利用による入学者は、推薦入試、AO入試による入学者と比べて、「友人が出来るかどうか不安」と答える割合がやや高く、ここでも入試区分による特徴が見られる。

将来の希望はあるが、実現に向けて何をすればよいか分からない

将来の進路については、志望業界や志望職種がはっきりしている学生は6割に及ぶ（図7）。入学生の大半が将来の希望を持っているわけだが、その一方で、希望進路

に進めるかどうか不安に思っている者が5割に迫る。将来の希望を実現させるために何をすればよいかを明確にすることで、学生の不安は大きく払拭されるだろう。

図6 大学生活への不安

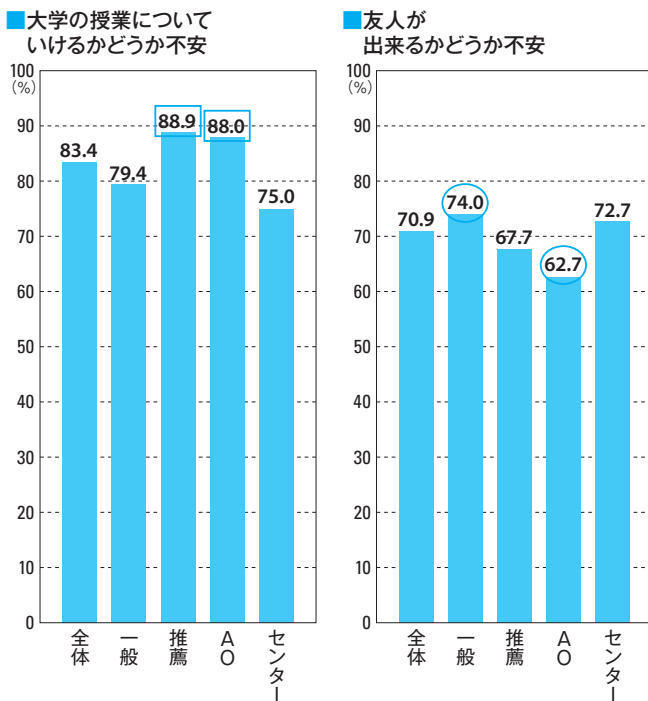
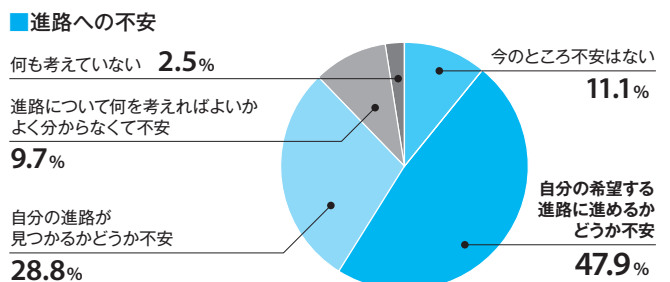


図7 将来の進路に対する意識

質問内容	全体	一般	推薦	AO	センター
志望業界がほぼ決まっている	59.2	60.9	55.9	61.9	63.3
自分の興味に直結する仕事が決まっている	60.3	60.7	58.1	65.5	61.8
将来のワークスタイルについて希望が明確である	51.5	52.1	49.2	55.3	54.0



出典/ベネッセコーポレーション大学事業部「大学生基礎力調査I」（2011年）

調査対象/大学1年生 全体89,015人 入試区分別（一般入試36,052人、推薦入試34,421人、AO入試6,693人、センター試験利用7,775人、その他4,074人）

入学生の実態から見てきた「大学に求められるもの」

社会で求められる「問題解決力」や「継続的な学習力」を大学卒業までに育成するためには、学生に自分なりの学び方を早期に身に付けさせることに加え、大学の授業を通じてグループで学ぶ機会や自分の意見や考えを発表する機会をこれまで以上に与える必要がある。また、「自ら考える力」も、日々の講義や実習などのなかで、より意図的に教員が学生に問い掛けるなどして身に付けさせなければならない。

入学してくる学生の多くは学習面や人間関係に対して不安感を抱き、将来の進路へのアプローチ方法についても迷いがあることを見過ごすことはできない。そのため、ただ単に多様な学習機会を提供するだけにとどまらず、教職員が連携して、入学してくる学生の意識や特性に寄り添い、「大学」の固定観念や既存の枠組みにとらわれない、新しい学生支援が求められている。

3 大学の授業は、どんな力を身に付けさせているのか

ここまで、社会が求める力と大学に入学してくる学生の実態を見てきた。
では、大学は日々の授業でどんな力を育成しているのだろうか。学生の実感から探してみたい。

現段階では、「社会で必要な力」が養われたと学生は実感していない

就職活動を経験した大学4年生に対する調査（図8）によると、大学生生活を振り返って「社会で必要な力」が養われる機会があったと回答している割合は、どの能力・スキルについても低いスコアとなった。

既にさまざまな大学では、就業力の向上を意識して社会で求められる力を自校で定義し、育成する取り組みが行われている。だが、図8を見る限り学生自身の手応え

は小さく、その成果は期待通りとは言えないだろう。

社会で求められる「問題解決力」「継続的な学習力」「主体性」「チームワーク力」などを、大学はどのように育成するのか。そのスキームを個々の教員の努力に委ねるのではなく、大学全体のものとして組み立て、更に学部系統ごとの特徴を踏まえて改編し、学生に明示する必要があるのではないだろうか。

図8 大学の授業で次の能力・スキルが養われる機会があったか（大学4年生 n=1,731）

	全体	人文系統	法学系統	経済系統	理工系統	その他
問題を認識し、必要な情報を収集・分析・整理し、問題を解決する（問題解決力）	36.1	40.5	36.5	32.9	33.1	37.5
進んで新しい知識・能力を身に付けようとする（継続的な学習力）	30.7	34.1	27.6	25.3	28.8	34.3
自らの考えで責任を持って自律的にものごとに取り組む（主体性）	31.9	35.6	31.8	26.8	25.8	36.6
チームの中で協力しながら自分の役割や責任を果たす（チームワーク力）	44.1	42.8	29.4	43.7	40.5	50.6
目標の実現に向けて計画をし、自らを律して行動できる（自己管理能力）	25.0	25.8	27.1	20.8	22.4	27.8
現状を分析し、問題点を明らかにし課題として設定する（課題設定力）	33.4	33.7	34.1	33.4	29.4	35.1
筋道を立てて論理的にものごとを考える（論理的思考力）	37.6	42.4	51.2	32.4	35.8	35.9

(%)

出典／Benesse教育研究開発センター「社会で必要な能力と高校・大学時代の経験に関する調査」（2010年）

調査対象／大学生：就職活動を経験した大学4年生（4年制大学） 1,731人

まとめ

社会と学生のギャップを克服するためには 広い視野で教育をとらえ直すことが必要に

このコーナーでは、社会で求められる力と入学してくる学生の実態とのギャップ、そして卒業を目前にした学生の大学教育に対する評価をデータで見えてきた。

社会で仕事をするに当たっては、「問題解決力」「継続的な学習力」「主体性」などが求められている。しかし、入学してくる学生は、「自ら考える力」「学習上の計画性や自分に合った学習スタイル」「考える力」などに対して自信がないようだ。また学生は大学生活自体にも不安を抱えており、将来の希望の実現に近づいていることを実感しながらギャップを克服していくためには、大学は広い視野での教育のとらえ直し（図9、P.3参照）を進める必要があるのではないだろうか。

本誌では、変化する社会に対応して教育改革を進めている大学の取り組みを、事例コーナー（P.17～29）で紹介する。

図9 これからの大学の役割

